

第1回 中標津町都市計画マスタープラン 策定委員会 議事録

◇開催日時：平成30年10月31日（水）14時00分～16時20分

◇開催場所：中標津町役場 3階301会議室

◇参集者：委員23名中 18名出席

1. 開会 中標津町建設水道部都市住宅課長 渡部英樹

定刻となりましたので、ただいまより第1回中標津町都市計画マスタープラン策定委員会を開催いたします。本日はお忙しい中、策定委員会にご出席いただきありがとうございます。本日の進行役を務めさせていただきます都市住宅課長の渡部でございます。どうぞよろしくお願いいたします。本日の策定委員会開催につきましては、委員の半数以上の出席がございますので、会議が開催できますことを報告させていただきます。

それでは早速ですが、町長より委員の皆様へ委嘱状の交付をさせていただきたいと思っております。

2. 委嘱状の交付

出席委員18名に交付

3. 挨拶 中標津町長 西村 稔

皆様こんにちは。本日は何かとお忙しいところお集まりいただきまして大変ありがとうございます。秋も大分終盤に向かって参りまして、雪の話もチラチラと出てくるようになりました。またカラマツの紅葉が全て真黄色にはなっていないということで、晩秋をあまり楽しむことができていないような気もしますが、いずれにしてもどんどんと寒くなって参りまして、長い冬が近づいているということは間違いないところでございます。

さて、本日は都市計画マスタープランの策定委員会ということで、日頃よりまちづくりに関してご協力をいただいていることを、この場をお借りして厚くお礼を申し上げます。都市計画マスタープランは平成13年に20年先を見越した計画が策定されまして、その10年後の平成23年に中間見直しを行い、さらに10年が経過するというところで新しく計画を作ろうということになります。今年から平成33年3月までの2年半という大変長い任期でございますけれども、委員の皆様にはご苦勞をおかけしながら計画策定に向けていただくわけで、本当に委嘱させていただきますありがとうございます。また、計画策定にあたりまして小林英嗣様には本当にお世話になっておりまして、最初の都市計画マスタープランの計画策定や、その計画見直しにあたるまで、そしてまた今回もということで、長い間におきましてご苦勞おかけしております。本当にありがとうございます。

我が町におかれましては、人口が減るということで24,500人いたのが23,500人まで減ってしまいました。これからも人口は減ることが予想される中、当町は既にコンパクトな町になっているところではございますが、さらにコンパクトに事を考えていかなければならないということで、インフラ整備は人口が減ってもかかるお金というのは変わらないので、そういうことを将来的に見越して色々やっていかななくてはいけないという状況でございます。ですが人口が少なくなるからといってまちづくりをしないというわけにはいきませんし、より素敵な町に

するためにはぜひ皆様のご協力をいただきたいと思っております。また都市計画区域の中に計根別地域は入っておりませんが、今回からは計根別地域から代表をお迎えしまして、一緒に計根別のまちづくりを考えていただくということで、どうかよろしくお願ひしたいと思ひます。

今回のマスタープランの策定が、今後のまちづくりの設計図になるので、ぜひ皆様から活発な意見をいただきながら、よりよいまちづくり、住みやすさ No.1 のまちを目指して今後とも頑張っていただけるようによろしくお願ひ申し上げまして挨拶とさせていただきます。どうぞよろしくお願ひいたします。ありがとうございました。

4. 委員紹介、事務局紹介

各委員より自己紹介及び、事務局・委託業者（株ドーコン）の自己紹介

5. 委員長・副委員長の選出

（事務局）

会議次第に基づきまして、委員長・副委員長の選出を行いたいと思ひます。事前に皆様にはご理解を頂きたいと存じますが、この度の都市計画マスタープラン策定委員会に当たりまして、当計画が全体のまちづくりと地域別構想により構成されていることから、副委員長につきましては、2人体制により構成したいと考えておりますので、ご了承願ひます。

それでは委員長及び副委員長の選出についてですが、中標津町都市計画マスタープラン策定委員会設置要綱の第5条により、委員の互選によって定めることとなっておりますので、委員長、副委員長の選出につきまして、選出方法など委員の皆様からご意見を賜りたいと思ひます。

（委員）

事務局一任で願ひします。

（事務局）

事務局一任とのご意見がございました。いかかでしょうか？

【一同了承】

それでは、事務局案を申し上げます。

委員長につきましては、長年中標津町の都市計画に係わっていただき、今までの都市計画マスタープラン策定におきましても委員長を務めていただいている小林英嗣委員に願ひしたいと思ひます。また副委員長につきましては、全体のまちづくりとして、商工会にて長年要職に就かれてご活躍いただき、またまちづくりにおいても積極的に取り組んでいただいております館下委員に願ひしたいと思ひます。副委員長のもう一方には、現行の都市計画マスタープランにおける地域別構想実現の中で、積極的に地域のリーダーとして、継続した取り組みを行っていただいております、また全町内会連合会役員として要職にも就かれております佐々木優委員に願ひしたいと思ひます。皆様いかがでしょうか。

【異議なしの声】

（事務局）

ありがとうございました。それでは、本策定委員会の委員長を小林英嗣委員、副委員長を館下委員、佐々木委員に願ひしたいと思ひますので、よろしくお願ひ致します。

(委員長：小林英嗣委員 副委員長：舘下雅志委員、佐々木優委員)

それでは議事に入る前に、小林委員長よりご挨拶いただきたいと思います。

(委員長)

改めまして小林でございます。実はすごく難しいなと思っていて、その理由の1つは、365日ここに住んでいるわけではないということ、もう1つは町長もおっしゃっていましたが人口が減っているわけです。人口が減っているというのは、高齢者が増えてくるということだけではなく、町の経営をどう考えていくかという、財政の問題としてどんどん収入も減っていくわけなので、そういうことも見据えなくては、人口減少の問題は解けない。都市計画マスタープランは総括部隊が物を作ってどこに何をやるかを考えるものと、つつい考えてしまうのですが、そうではないわけです。中標津は非常に独特な町で、似た町というのがないのです。産業の成り立ちや空港の近さやなぜ出来たかなど、道東の要所として独特な町です。その独特な町をどのように皆さんで方向性を読んで、子どもに打っていく町にするのか、考えなければいけない。そういう難しさがあるなと思います。ですが皆さんがいらっしゃいますので、皆さんの考えと、それから町の知恵を少しリンクさせて進めていくことが僕の役割かなと思っております。よろしく申し上げます。

(事務局)

ありがとうございました。舘下副委員長及び佐々木副委員長におかれましては、委員会の終わりにご挨拶お願いいたします。

6. 議事

(1) 中標津町都市計画マスタープランの見直しについて

(2) 現行計画の検証と都市づくり上の課題

(株)ドーコンより資料に基づいて説明

意見交換

(委員長)

どうもありがとうございました。これから話しやすくするために、少し違う町のお話をさせていただきます。東北のとある町で開かれた、将来を町をどのようにして考えればいいのかというワークショップに参加したのですが、そこでも今のようにコンサルタントが少し話していたのですが、地域の年配の方あるいは考えていきましょうという方が説明する時に、地図を見ながらこの通りはとか、この場所はとか、この公園はとか、全体を見ながら将来をこのように考えていけばいいですねという話をされていたのです。そこには中高生の子もたくさん参加していたのですが、彼らの話を聞いて、目からうろこが落ちました。というのは、そこで生まれ育ったある女子中学生が、私たちはそのように町全体を地図で意識していませんと言いました。生まれた場所、ご飯を食べる家、友達の家、学校、遊び場、おじいちゃんのところ、そんなように今まで育った十何年間自分たちが生活してきた、あるいは家族が生活してきた場所、友人たちと楽しんできた場所などは全部頭に入っています。

ですが町全体としてこの通りをどうするかなどは意識していないのです、という話をされました。それでそういう十何年間の女生徒の生活なのですけども、本当にここのバス停のところにあるお店は、おじいさんに配慮していて、待ち合いも作っているし、そこにバスが来ないとお茶を出してくれる人もいるし、ここは町にとって非常に良い場所になっているとか、それから子どもたちはこういう場所で遊んで、ここは周辺の人たちも公園を少し整理してくれたりして、非常に遊びやすいし楽しいのです。そういう記憶に残っている場所の話を小さい子どもたちがしていました。その子どもたちはそうやっておじいさんおばあさん隣近所の人に自分たちの町をそのようにして送られてきたから、自分たちはそういう場所をもっと磨きをかけて良いものにして、次の自分たちの小学校に入ってきた子ども達などに送ってきたいという話をされていました。町を考えたときに、数字だとか図面全体がこうなっていると考える考え方と、自分たちの日々の生活あるいは働く場所、常に使っている場所、楽しい思い出の場所、つらかった場所、危険な場所というように自分の生業や生活の中で、出会った場所、大事な場所などをキチンと頭に入れながら将来を考える考え方と2通りあるわけです。それでついつい客観的に見る数字や地図、統計などで見るというのが正しいように見えるのですが、これまでは数字での予測というのは、そんなに嘘をつかなかったのです。ですが、これからはどうなるかわからない状況なのです。今までに事例がないことばかりが日本中で起きています。数値的な統計というのは必ずしも将来を考える材料にならないのではないかと統計学の人も気づき始めた。先ほどご説明いただいたようなことも非常に大事なのですが、自分たちの日々の生活やこれまでの体験に磨きをかけて子どもたちに渡していくというような日常のことをベースにしながら、あるいは仕事のしやすさ、仕事をしていくときの条件など、そういうのを含めながらリアルの話をしていくことが大事なのかなと、その町に行ってみようと思いました。ということで、今までは町の方とコンサルタントの方が色々と議論をして、説明するときに自分たちはこう思っていますとおっしゃっていたのですが、これからは皆さんがこのように思っていますということや感じていますということやぜひ言っていただければありがたいなと思います。

それではA委員、お子さんがいて、そしてパンを焼いているということで、そういう皆さんの集まる場みたいのを大事にしながら子育てをされていると思いますが、中標津町の特徴や良さ、悪さ、このようになっている、このようになってほしいということを含めながら、日頃から考えていること、思っていることを言っていただければと思います。

(A委員)

ずっと子育てを中標津でしてきて、自分自身は標津町の酪農の生まれで、高校から釧路市に行き教員になり、羅臼町に行き、結婚して中標津に来ました。中標津に来たのは実家が近いということと、羅臼町で子育てをするということに対して非常に不安があったということがありました。病院が遠いとか、習い事などの選択の幅が少ないとか、学校自体も小さいということで、色々な出会いの場がある中標津町のほうが暮らしやすいと今も実感しております。

今、思っていることを答えさせていただくとすれば、わたしの息子が中学3年生になりまして、高校の選択を考えているところです。自宅から通える高校というのは中標津高校か、

農業高校、別海、標津と限られています。自分自身は釧路に出たという経験があったので、家から離れて高校に行かせるということは特別なこととは思わないところもあるのですが、自分が釧路に住んでいれば釧路の色々な高校を選べたのだろうと、息子と一緒に暮らせたのには思います。それで今は幼稚園、小学校、中学校と親として関わらせていただいている、特に教員だった経験があるのでなおさらそう思うのかもしれませんが、教育について熱心に考える方と、考えない方の幅がすごくあるなど感じております。幼稚園はある程度手がかかるので親も関わっていくのですが、小学校になるとなかなか親が関わってなにかするというのが減っていきますし、親同士の繋がりを人同士の繋がりと考えると、そんなに全体的に協力し合う場面というのは、自分が子どもの頃よりは減っているのかなと思いました。人同士の関わり方というのが、近所の方と付き合っていくというよりは、自分と同じく気の合うような人とネットなどで繋がっている、みたいなのを感じています。町内会に入っているのですけども、町内会では私は珍しいぐらい若手のほうで、自分はわりとそうやって地域の人が子どものことを知っているとか、どんな人が住んでいるかわかるということは、安全に暮らしていくためだとか、災害での協力とかを考えると必要なことだと思っています。

(委員長)

ちなみに町内会はどこに所属しておられますか。

(A 委員)

旭第1町内会です。

(委員長)

今も子育てをされていますが、中標津町は子育てをしやすい環境だと思いませんか。

(A 委員)

子どもと一緒に出かけられる場所もあるので、良い環境だと思います。

(委員長)

ただ地域での繋がりが弱く、困ったときにお互いを助け合うような、情報交換をし合うような場所や機会がそんなに多くないとは感じますか。

(A 委員)

自分自身が田舎の小規模校で育ったので、そこではすごく地域と関わりがあって、それから見ると中標津町はすごく都会で、学校自体が何クラスもあるという状態が自分の経験ではなかったので、親たちもわりとドライな付き合い方です。

(委員長)

次回からはもっとディープな話を聞きたいと思います。ありがとうございました。

B 委員は元々計根別のご出身ですか。

(B 委員)

出身は西竹という地域で、3、4年前に西竹の学校が統合によって無くなり、子どもが計根別学園に通っております。

(委員長)

お仕事を選ばれたわけですが。中標津でお仕事を継続してやりたいと思った理由はなんでしょうか。

(B 委員)

元々、農家の生まれで、地元の学校で育ったのですが、農業以外の世界も見てみたいと思って埼玉の工場に何年か勤めたのですが、親が調子悪かったのもありますが、やはり大きな企業の歯車として人生が終わるのだったら、何か自分で見直して、今まで親が作ってきたものを引き継いでやっていきたいなと思いがあって、こうしてやっております。

(委員長)

それは間違いなかったですか。

(B 委員)

間違いかといわれれば間違いもあるかもしれないが、今の仕事をやり始めてから趣味がある中で人付き合いが広がって行って、まちづくりというところの新しい目線で関わっていけるというのはすごく良いことだなと思っております。

(委員長)

仲間とまちづくりの話がされるときに、3つ大きなテーマを言ってくださいといわれれば、どんなことをテーマにしながら議論されていますか。

(B 委員)

現在はみんなのなかしべつプロジェクトのほうに関わらせていただいているので景観というところと、今は町内会の加入率が低くなって人同士の繋がりが希薄であるということで町内会の話と、自分がやっている産業の今後というところの話にもなっております。

(委員長)

計根別の方って、すごくプライドがあって活動をしているの思うのですが、後で聞きたいと思います。

(B 委員)

西竹はどちらかというと、農協が中標津農協で、子どもが計根別の学校ですが少し計根別とは距離があるような立場です。

(委員長)

C 委員が先ほどたくさん提案があるとおっしゃっていただきましたが、もう少し詳しく言うていただければと思います。

(C 委員)

素朴にこの委員会に公募したキッカケというのは、私は暖房を薪にしているのですが、それを30年40年近くしております。それで50年60年経つとカラマツの格子状防風林が年数経っているということで、これを切り倒してさらに植樹をしていく、それを大掛かりにやっっていく中で個人のものとして木がもらえないかなと率直に思いました。それはその背景には50年60年と経過しており、倒木が非常に多い。実家のほうでは60年代のカラマツがあり、倒木が激しくて、それをいただいて今回切ったのですけども、それを来年になって植樹しようかなと、そういう流れを作っていくのが必要なかなと思いました。自分はやはり薪が手に入るようなものの考え方、いいのか悪いのかは別としてそういう考え方がほしいと思っております。

(委員長)

今おっしゃっているカラマツというのは、保安林のカラマツということですか。

(C 委員)

個人の農地にも昔から植えてあるので、それを無駄に切るのではなく、切って、植えていく、そして切ったものを自分自身に還元していく流れが欲しいと個人的に思いました。

(委員長)

景観の計画を作るずっと以前に議論したのですが、中標津町が独特であるという特徴の1つである、宇宙船から見える防風林が、すごく大きな特徴が大地に刻み込まれているが、あのメンテナンスは誰がやっているのか。大事だとは言うけども、結構ボロボロで、あの国有林のメンテナンスをしていく仕組みをちゃんと作らないと、特徴あるから大事にしていきたいと思います。ただ進まないという話をやっていたよね。それをずっと受け継いで景観計画ではどうしようとしていますか。

(D 委員)

とりあえず格子状防風林は国のものなので、何度か東部森林管理署さんにもヒアリングで行きましたが、向こうで言われた言葉は、倒木をしないようにこれからエゾマツやトドマツに植え替えていこうと自分たちは思っています、常に緑の状態にしたいと言っていました、それが中標津町を含めた格子状防風林で繋がっている4町の皆さんがそれを受けいれてくれるのか、風景が少しずつ変わっていくので、自分たちはそうしようと思っているが町の皆さんと一緒にそういう場を作るのがやぶさかではないのですが、どうですかというお声かけをいただいて、当時文化的景観のときに何度かお声かけはさせていただきましたが、なかなか

自分たちの町で酪農を含めて守ってくれているものですが、施業しているのは国だということで、どうしても微妙な乖離があり、町民が守っていこうとはなりませんでした。

(委員長)

そのときに話題になったことの1つに、国は言うけどやらないのですよね。それでその時に、阿寒周辺の話が出たのですよ。あそこは国有林と民有林があり、民有林のほうは2000haぐらいあるのですが、山のメンテナンスをして守っていくキーパーソンが7人くらいしかいない。それであれだけのことが出来て、地域経営に関わっていける。そういうようなことを裏で作っていく前提でいかないと、景観は地域あるいは国、環境にとってもプラスにはならないなという話をしました。それをどう展開するかというのは、今の話を伺って結びつけながら考えていけるのじゃないかなと思いました。都市マスというのは要するにお題目を書いて、こういうようにするといいのですよねと書くのではなくて、地域の問題あるいは町の問題はなにか、その問題はどこにあるのか、その問題は誰が、いつ、どこで解決するのかということ、はっきりさせるのが実は都市マスなのです。都市計画マスタープランというのは都市計画法を背景にしているのですが、実は何をやってもいいのです。つまり地域で抱えている問題を解くというのが都市計画マスタープランの本当の目的なので、こういうことをやらなければいけないというフォーマットがあるわけではない。20年前に作った中標津町都市計画マスタープランもどこにも例がないようなマスタープランです。これからも独特な産業、独特な大地、独特な人々、そういうもので成り立ってきている町なので、独特なマスタープラン、要するに約束事ですね。誰がいつどこでどんなことをプレイして町をブラッシュアップしていくのか、あるいはプレゼントしていくのかを書いてみんなに共有するのがマスタープランです。

ではE委員、JCのまちづくりセクションがありますが、先ほど3つと言いましたが、5つぐらいありますか。

(E委員)

まちづくりという観点で、毎年理事長が変わるのでその人の考え方によって組織の考え方も変わるので、やはり今考えているのが交流人口の拡大と定住人口の拡大、後は子育てしやすい環境づくり、他には企業誘致や専門学校高校の誘致という観点で、先生がおっしゃっていたように5つのプランがあります。交流人口の拡大につきましては、中標津町の特色を活かした町を考えておまして、北海道に2500名の青年会議所会員がいる中で、面白い取り組みをやっているのが網走市で、今キャンプ場を誘致しておまして、それを中標津町でも上手いことできないかなと考えているのですけども、定住人口の拡大については先日町長ともお話をさせていただいたのですけども、婚活パーティみたいなもので結婚率を上げるというのも考えております。景観につきましては僕には3歳の子どもがいるのですが、今日も行きましたが森林公園の木製遊具ですごく楽しそうに遊ぶのですが、残念なことに使える遊具が半分くらいしかないので、そこをなんとか若い世代が声をあげてお金を出していただくか、もしくは自分たちでクラウドファンディングなどを使って遊具の整備などができればなど今掲げております。

(委員長)

JCの良いところは、言ったらやるということです。大規模なことをやった世代もありますし、ちゃんと着実にやっているという印象です。それで定住人口や交流人口の話がありましたが、そのときに少し意識しなければならないことは、人口は数だけではないということ。それは人の質が問題ということ。尖がった人がどれだけいるかということが問題で、関係人口を増やせばいいということと、尖がった関係人口を持つということは少し違う。という議論が最近良くされています。JCなどは尖がった人同士繋がるのが好きなので、そういうJCならではの尖がった人間関係を作り上げる。それで網走市ばかりではなく、色々な意味でプレイしてもらおう。そういうシナリオを作っていこうとされているのかなと思いました。

(E 委員)

若いからこそ無茶もできるのかなと思っていますので、色々は無茶しながらやっていきたいなと思っています。

(委員長)

ぜひ無茶してください。それでじゃあ自分たちはどういうところでどんな無茶をしたいのかということをお願いできると、おのずと都市計画マスタープランというものの中に組み込まれていくと思います。よろしくお願いします。

同じぐらいの年代ですが、F 委員はどのようにまちづくりのキーワード、柱を考えておりますか。

(F 委員)

僕はちょうど2年前から景観まちづくりに関わらせていただいておりますが、ちょうど僕が住んでいる計根別という地域が、どんどんと中標津以上に人口が減少していき、高齢化が早いスピードで進んでおります。計根別というかなりコンパクトな地域で幼稚園から高校までの教育機関があるのですが、今まで子どもから大人まで関わられる事業というのがありませんでした。それでやはり子どもたちには町に魅力をもってもらって、将来的に帰ってきてほしい。人口を増やすというのは他の地域から引っ張ってくるというのが難しいというのがあると思うので、E 委員と同じ年なのですが、僕たちの世代というのが高校を卒業して一度札幌や大都市のほうに行き、ある程度の年齢になってから戻ってくるというのが多かった世代でした。今の子どもたちというのは出て行ったら出て行ったきりで、特に地元に対して愛着がないのかなというのが見受けられました。昨年に商工会青年部で、中標津小学校の5年生を対象に職業体験事業というのをやらせていただき、今の子どもたちの6割ぐらいの夢がユーチューバーで、インターネットで動画を配信して、広告をつけてお金を稼ぐというのを夢に掲げている子どもが増えているという現状がありまして、そうすると結局地元に戻ってくる必要性がなくなってしまう。僕たちの子どもの頃は外で遊んだり、お祭りがたくさんあって、僕が子どもの頃は養老牛のほうで雪上カーニバルというイベントがありまして、スノーモービルのレースだとか、気球を飛ばしたり、雪合戦やったりとそういうイベントが

ありました。そういうのが地元にあったことによって、子どものころ楽しかったな大人になっても戻りたいなという考えが芽生えるのかなと僕の中にもあったので、どうしても今の子どもたちに地域一体となって活動してもらって、この地域が楽しいな、子どものころ都心部と違って人のつながりが濃い町でよかったなと思ってもらえるような活動ができればいいなと思っておりました。今年度はみんなのなかしべつプロジェクトでハロウィンのランタンを作って、計根別の沿道を飾りつけしましょうというのを提案させていただきまして、先日の日曜日に計根別地域でランタンづくりをしました。初回なので計根別も子どもが少なく、定期的に学園祭もあったので参加人数は少ないのかなと思いましたが、当日は飛び入り参加を含めて親子 80 名弱ぐらい来てくれました。中標津で 80 名というとそんなに多くはない人数かもしれませんが、計根別の規模で 80 名となると、今までになかなかできなかったような活動のかなというのが実感する部分がありました。今年参加していただいた大人の方も子どもの方もすごく楽しかったというお声をいただきまして、ぜひ来年もやってほしい、計根別地域の町の中が賑わうような活動をしてほしいと声をいただきました。そういうのが増えていくと子どもたちも自分の町に興味をもつと思うし、そういう繋がりから将来的に地元に戻ろうかなと思うような子どもが何%か増えてもらえればいいなと思いました。まちづくりということで、人があってこそその町だと思うので、どんなに整理しても人が減っていつてしまうのであれば、どんなにいい町でも町として存続できなくなってしまうので、そういう部分も含めて、当然子どもばかりに視点を当てるのではなく、今までに町に貢献していただいたご高齢の方にとっても優しいまちづくりというのも大事だと思いますし、それと同時に未来を見据えて子どもたちに興味をもってもらえるような都市計画というのが大事かなと思います。

(委員長)

そういうランタンづくりの作戦会議はどこで行いましたか。

(F 委員)

みんなのなかしべつプロジェクトの計根別部会ということで、ランタンづくり実行委員会として計根別の交流センターで集まって行いました。

(委員長)

高校生や若い世代の人、年配の人も見ると楽しんだと思いますが、そういう人たちも含めて作戦会議をやろうとするとやっぱり交流センターになるのですか。

(F 委員)

やはり計根別でなにかをするとすると、交流センターが主体となるのかなと思います。

(小林委員長)

交流センターは使っていて心地良いですか。

(F 委員)

施設的にはそんなに大きな部屋があるわけではないですが、人数の規模的には使い勝手は良いと思う。なにかあれば体育館のほうの大ホールも使えるので。

(委員長)

なぜこういうことをお聞きしたかという、最近ブラックアウト以降特に話題に上っているのが、恵庭市にある「えにあす」という場所です。えにあすというのは複合施設で、スーパーもあるし、子どもが本に触れられる場もあるし、お母さんたちが集まるような場もあります。そこがなぜブラックアウトの時に評価されたかという、ローカルFMの主体がそこにあるのです。とにかく人がなにかあったときに行く場所で、すると大体のことがそこでほぼ解決できる入り口が見える。そのように複合的に集まっているというのがこれから作戦会議をするときにいいのかなと思います。機会があれば「えにあす」に行っていただければなと思います。FMの局の名前が「e-niwa (いーにわ)」とあって、社長が三浦さんという方ですが機会があればぜひ。計根別だけでなく中標津にも何箇所かこういう施設があればいいのかなと思いました。

では中心部のほうの話をしていきたいです。G委員はどこにお住まいですか。

(G 委員)

緑町に住んでいます。

(委員長)

それでお仕事は街中に行くという形ですか。

(G 委員)

仕事も緑町です。緑町の北と南に24時間のコンビニと飲食店を経営しています。

(委員長)

今回のブラックアウトの時は、地域の方とコミュニケーションはとれましたか。

(G 委員)

ブラックアウトの時は電池や食料を求めて皆さんこられたので、いつも以上の売り上げと、電気が止まっていたので廃棄もあって、売り上げはトントンでした。

(委員長)

ブラックアウトを経験されて、地域にとって大切な場所だということを実感されたと思いますが、もっと改善するように地域の人たちとの繋がりをどう考えたらいいのかとかありますか。

(G 委員)

元々あの地域にはなにもお店がなく、19年前に商売を始めたのですが繋がりはすごく深く、そういう商売がないとやっていけないという場所で、地域と密着で商売はしています。

今回、せっかくの場なので、19年前は住宅がすごく少なかったのですが、今はかなり増えていて、北には下水道が通っているのですが、道路を挟んで南には下水道が通っていない状況です。ぜひこういう場で下水道の普及を少し頭に入れてもらえたらと思います。個人的な話ですが12年前に南側でジンギスカン屋をやったのですが、来年にはまた違った飲食店も出来てきますし、個人的にも声をかけさせていただいてお店を増やして、今は南側の歩道は誰一人歩いていないですが、今後10年くらいの間に子どもが歩いてたり、観光の人がキャリーバッグを引いて歩いてくる、そんな勝手な個人の夢をもって、まちづくりとは考えたことはなかったのですが、自分の住んでいるところに対して夢をもってやっております。我々飲食業となると看板を建てたりと景観を逆に損ねたりすることもあると思うので、中々まちづくりということに関しては積極的に考えたことのない人が多いというのが実情だと思います。

(委員長)

看板の話も中々面白い話があるのですが、また次の機会に。

それではH委員とI委員にお聞きしたいのですが、それぞれのお仕事上で中標津がこうあったらいいなと考えていること、それから何名かが話したことを自分のノウハウや技術でなら解決できそうだなと思われたことがあればお願いします。

(H 委員)

自己紹介の時にこういう会は初めてなのでと言わせていただきましたが、考えてみると20年ぐらい前に策定委員会には参加していませんが、ワークショップには参加した記憶があります。その時にワークショップの中で言ったのは、まず中標津町に住んでいる人間というのは、都会に住みづらい人間が集まっているんじゃないのと、特に私が住んでいるのは川西という中標津でも外れのほうに住んでいるので、正直自分は町自体を大きくしようとか、人口を増やそうだとかという考えはないと、辛口を言った記憶があります。それで今はどうなのかというと、この年になってくると、立場も経営者ですし年齢もそこそこになって身体もあちこち痛んできて、病院ももう少し充実してほしいとか、仕事もないと困るなというようなことで、町が大きくなるということよりも、せめて現状維持をしてもらいたい。人口がどんどん減って衰退の方向に向かっているということで、これじゃあいかなと、考え方が変わってきました。なのでこういう場にも最近顔を出させていただいておりますが、具体的にあつたほういいとかこうしたほうがいいのかは今のところないのですが、みんなのなかしべつプロジェクトのほうにも顔を出させていただいておりますが、先ほどの話にあった計根別の取り組みなんかも新聞で見ると賑わっているようなので、そういう小さなことから少しずつやっていくしかないのかなと思います。やれる範囲でがんばります。

(委員長)

今、病院とか、医療の話が少し出てきましたが、相談に乗ってほしい時の病院と、しっか

り治したいときの病院って違いますよね。今の中標津というのはどのように医療のことでどう考えておりますか。

(H 委員)

先日、がん対策の講習会に参加したのですが、その時に会場の人に対しての質問があって、今あなたが癌だと告知されたらどこの病院に行きますかという質問を会場の人にして、まず1つは中標津、地元の病院で、もう1つは釧路の病院、そして札幌の病院、最後にそれ以外の東京などの病院、という質問をしたときに、中標津の時に手を上げた人は5、6人でした。釧路が一番多くて、次に札幌となっていました。理由は当然医療の充実というのが多かったです。自分は今のところそんなに大きな病気もしていないので、薬をもらいに通うぐらいですが、そのことについて考えたのが、今はインターネットが普及しているので、例えば外来なんかは札幌のお医者さんとインターネットで繋ぐことはできないのかなと思いました。特に薬をもらうだけだったらある程度話し合いで薬を出しますという感じなので、そういう形を取ると、中標津の病院の現状は詳しくはわかりませんが、出張医の経費がずいぶんとかかっているという話を聞きます。出張手当、旅費、宿泊費、そういうのを考えたら、インターネットで外来だけはネットで済まして、中標津の病院は治療と入院患者だけみたいな、そういうのはできないのかなと思いました。それを自宅と繋ぐというのは大変なので、町内会なら町内会の会館にそういう施設を作って、そこに看護師を一人置いてとか、そんなことも病気に關してはそんなことを考えたこともあります。

(委員長)

最後におっしゃられた e-Hospital の話で思い出したのが、黒川さんという政府の顧問の方がいらっしゃって、アメリカの病院のトップを経験された方なのですが、その当時厚生省とやり取りをしていて、厚生省に e-Hospital というシステムを日本にも入れなくてはいけないと、本にも書かれているのですが、そういうようなものもたぶん霞ヶ関で、決めてはいないと思うがそういう検討もしていると思います。ぜひ行政としてもそういう可能性を探りながら北海道がやると言ったから中標津町がやりますというのではなく、中標津町は独特な町なので、リンクを張りながらチャレンジするというのも大事なのかなと思いました。そういう意味で比較的広域の仕事をしなればいけない農業の従事者が多いところの病院で頑張っているところがあります。e-Hospital ではないですが、患者が病院に来るのではなく、医者が患者のところに出かけていくという体制にした病院です。そういう医療の先進的なシステムを作るというチャレンジも有用なことかなと思っております。ありがとうございます。

I 委員、購買部長ということで、色々なことを現地を見ながらお考えだと思いますが、ご自信の JA という立場でのミッションのようなものと、ご自身の生活や家族のことを含めながら、良い住まい続けていける町にするということ、この2つについてお考えがあればお願いします。

(I 委員)

4月に購買部長になったばかりの新米だったのですが、その前は26年ほど農産販売課とい

うところで仕事をしていて、今は大根農業が当たり前になっていますが、始めたのがちょうど 20 年くらい前で、その時に大きな中標津の変革があって、この地域に畑作は珍しかった、馬鈴薯やビート。役場庁舎の裏に昭和 40 年ごろにでんぷん工場があって、それから武佐に移転して、平成 11 年のときに閉鎖になりました。その時に畑作農家が 50 件くらいあって、売り上げが 10 億くらいあったのですが、工場がなくなるということは、他に何をやろうという時にたまたま出会いもあって大根をやろうとなりました。当初試験から初めていったのですが、5 年経ったときにいけると、地域を活かすると、冷涼な気候と、人がそこそこいるので手作業ができる。釧路から船が出ている。なども利用させてもらいながらこれはいけるなど、その時に意外に人が集まった時代で、もうちょっとなにかやろうと、ブロッコリーを少し取り入れて、それから 20 年近く経って、今では売り上げはビートなどと逆転するぐらい、7 億くらい野菜販売していて、ビートが 2 億 3 億くらいになって、売り上げは変わらず、農家は半分くらいになってしまいましたが、面積は維持できているので、手伝ってくれる人たちが増えてきているという現象が起きていて、なおかつ直接販売しているので、年に何回かは南のほうで宮崎とか長崎とかに売りに行ったりします。ここにきて問題になっているのは、やっぱり人手が足りない。

中標津町の開陽台にきた時にみんないいなというのですが、その時にある人は階段がきついと、行きたいけどきついのので冗談ですがエスカレーターにしようとか言っています。そしてみんな遊びに行くのじゃないかと。開陽の牧場風景もすごく良くて、でも東武に言ったりすると意外に都会的だったり、他にも道立公園があったりとお昼はいいのですが、以外に夜にご飯を食べると、物足りないなと思うところがあったりします。なんとなくピンチはチャンスというところがあるので、酪農はクラスター事業でドンドンと牛を増やしていて、停電になると色々問題があるのですが、なんとなくピンチはチャンスという部分と、農業が中心の町で、増やすのですけども人手が足りないという状況はチャンスでもあるのじゃないのかなと思いつつ、そういうのを上手にやれる方法がないのかなと思っております。

(委員長)

前回の都市マスの時には、計根別地域を加えることができなかつたのですが、今回は参加してもらいました。計根別はある意味でプライドをもっている集落だと思っております。中標津とうまくやり取りしながら独特のまちづくりを進めていかれる知恵と人材がいらっしゃると思いますが、そんな中で活動をしていて、計根別についての意見をお聞かせください。

(J 委員)

中標津町と計根別というのを農協目線で見ると作りが違っているので、やはり中標津農協は都市型の農協というイメージがあって、街中の人との繋がりも強くて、金融事業や共済事業もかなりやられている。計根別ではやはり相手は農家で、町の人口が 700 人か 800 人くらいだと思うのですが、そういうところで中標津のように金融や共済で商売はできないので、そこでなにをやるかとなると、やはり酪農に行くしかなくて、それで計根別農協として自信を持てることは、他の農協もそうだと思いますが、やはり組合員である酪農家との距離が近い農協だなと感じております。事務所に来てもらえればわかりますが、何時きても酪農家の

方々がちょっとしたことで農協を頼ってきていて、どの時間帯に行っても誰かしらいる農協になっているなど感じていて、その中で仕事を行っていて、今苦勞しているのが、昭和 63 年に農協に入って、入った時には酪農家が 240 戸くらいあったのですが、この 30 年間経って現在の戸数を見た時に 135 戸まで減少している。30 年間で 100 戸減って、その中身を見ていくと新規就農者というのもこの近年 20 戸～30 戸入っているのですが、実際に計根別で育て酪農を続けてきた人たちというのが、この 30 年間で半分いなくなっているというのが大きな課題で、産業として地域を守るために酪農家の人たちの戸数を何とか維持すると考えた時に、新規就農に頼らざるを得なくて、去年までは順調にきていたのですが、今年になって人材不足で中々見つけられなくなってきた状況になっていて、地域を維持するためにもなんとか酪農家を見つけ出さないと、酪農家を減らさないための取り組みをなにか考えなければと思いますし、こういう場で皆さんの意見なども聞いて参考にしながら取り組まなければいけないなと思っております。

(委員長)

同じ計根別の F 委員のような年代の方とはどんな話をされていますか。共通の場で話したりする機会というのがありますか。

(J 委員)

あまりないです。

(F 委員)

地元と同級生の農家を経営している方がいて、生まれてから中学生までずっと同じ時間を過ごして、同じ教室で育ってきた者同士でも、なかなか難しい。

(委員長)

一回、世代同士で話してみたらいいと思います。

(K 委員)

やはり地域として結びついていないと難しい。

(委員長)

最初に中標津に来た時に、伝成館を壊す動きが始まっていて、どうしようかというのを見てくれと言われて来ました。その後ずっと頑張っていらっしゃいます。今では色々な人たちの交流の場になっていますが、交流の場所というのが地域にとってすごく大事な気がします。K 委員には、これで今まで経営してきた立場で、中標津の方たちが交流するような場所がもっとこんなところにあったほうがいいんじゃないかということを考えているんじゃないかと思うのですが、どうでしょうか。

(K 委員)

昭和 2 年に建った建物ということで、ああいう建物は他に中標津町にはないのです。守ろうとした人たちは元々農業試験場におられた OB だったので、その人たちが委員となりましたが、わたしが何に惚れたかという、残そうということに惚れたのではなく、伝成館街づくり協議会という名前がついたところに魅力を感じました。小林委員長がおっしゃったようなことをやっていくのだろうと、初めはみんなが集ってくるような場所にしたいという気持ちがありました。正直に言って、運営が大変でした。自分たちの提案で NPO 自体として動かなければいけないのですが、ドンドンと理事が辞めていってしまって、今残っているのは代表であるわたしと、元代表の副代表と、もう一人の 3 人で維持しているようなものです。初め目指していたような街づくり協議会になりきれないというのが実態です。わたしが思い描いていたのは、町の人があそこに集ってきて、色々な交流をするような場にしたい、それがまちづくりに繋がるぞという気持ちがありましたが、わたしもう 80 歳なので、正直かなわなくなっている。今はなにを考えているかという、できれば町としてあそこを街づくり協議会の場として町民が集う場にしたいと、そのためにはもうちょっと行政的なてこ入れがないと、にっちもさっちもいかないという状況です。建物としては有形登録文化財までいっていますから、そう簡単には壊されない、それは私たちの力で持ちこたえたのですが、今でも色々な人がきているのですが、町民が集ってくるという状況にはもってこれない。運営上色々と問題があったので、今後町にとって伝成館をなんらかの形で活かしていくとか、せっかくの文化財として活かしていく方向を模索してほしいなと思っております。

(委員長)

ありがとうございました。L 委員、まったく別の視点ですが、町内会全体の指揮者のような立場だと思うのですが、それぞれみんながいいプレイをしてほしいということでもうまく調整をしながらバランスをとっていると思いますが、そういうバランスをとっていく上で、これから町とこのように連携したいとか、あるいはそれぞれの町内会でこうやって濃密にやりたいとか、人の集まる場所のようなものを展開していきたいとか、そんなことをお考え方と思いますが、どうでしょうか。

(L 委員)

今、大きな問題としては、どこの町もそうですが、みんな町内会に入らない。今、中標津町で加入率が 50%を切ってしまっている。人口の半分が町内会に入っていないわけですね。それで町における町内会の関わりだとか、力だとかが組織的に言うと半分以下になります。今後どうしたらいいのかというのはわかりませんが、こういう機会なので別の話をしたい。

わたしは実は仕事が商業で、バイパスの東にある、かつての大通りというところをこの前車でゆっくり走りました。お店が結構並んでいるのですが、ここには後継者がいる、ここにはいない、ここは老いた夫婦が二人でやっているのだからぶん身体が動くまでやるけどやめよう、そう見ていくと半分以下なんですね。果たして町の顔とはどこなんだろうと、かつては町並み、あの町に行けばというのが町並みだったのですけども、今の中標津には町並みというのが無いに等しい。これらの問題を全体的な都市計画の中で、町並みとか町とかを

どんなイメージで考えていらっしゃるのか。一体都市マスというのは、町全体の顔をどんな姿の顔を描くのか、そんな思いをしております。

私事ですが、お店を息子に譲ってしまって、譲ってしまうとなぜか、自分が今まで見てきた目線とまったく目線が変わります。今まで一応経営者でしたので、どこかそういうものを心に詰めながら考えていたのですが、現在は経済的なものが全て取り払われて、そういう目で見ると、ふっと町の景色が変わるのです。具体的に上手には言えないが変わりました。

青年会議所の時に、昔あった駅から、ずっと役場のほうに向かって通りに、旅館がぶつかってしまって、そこを突き抜けたいと、旅館をどけてくれ、丸山公園を抜けて行ってしまおうと、綺麗に町を4つにして円を描こうということで、青年会議所で考えて、わたしもそのメンバーとして行政にもっていきました。見事に突っぱねられました。当時は、若い連中が勝手に町の図面を引くなど、今は当時の人がいないので言えますが、物凄くショックを受けました。そうだよな、まちづくりになんて町民がするものではないと。やはりプロがやるものだ。ではプロとは誰なのかというと、やはり役場です。役場の職員一人ひとりがまちづくりのプロでないといけない。ですので、これは我々集まっています、どれぐらいの意見で、本当にきちっとしたストーリーをもって、ここ100年、少なくとも2、3年は知っていたストーリーをもってやっていかないと、先ほど言った町並みだとか、ここだけを少しだけいじるのは出来ませんが、それは違うかなと気がしていました。

中標津には素晴らしい文化施設があります。文化というのは後から付いてくるものだと思っていました。今でも思っているのですが、一番良い例が、素晴らしいコンサートをやり、入場料6000円です。見たいです。なのに経済的に見られないのです。そこが先ではないのかなと僕は思いました。それともう1つは、今日はちょっと食事に行くから良い服を着ていくと、でも1歩外に出たら下水道の臭いがする、車が通ったら埃が舞う、これかよと思ってしまう。こういうことのほうがもっと大事な事かなと思っております。順番からいくと、住んでいる人のために、環境の部分を良く、どこに公園が出来て、素晴らしい公園だ、出来たはいいけど誰が遊んでいるんだと、ではなくて生活に密着したところから進んでいくと、きっと素晴らしい町になっていくのではないかなと思います。色々と枝分かれした話で申し訳ないです。

(小委員長)

町並みの話は、町は変わっていくものですが、最初に話したように都市マスというのはどういった問題を、あるいはどこの問題を、誰が、いつ、どうやって解いていくのか答えを出す、あるいは答えを出す試みをするのか、それが都市マスです。なのでおっしゃられた中心部でそれぞれ経営されている人とか、色々な問題がありますが、全部解決するのは難しいけど、この部分はみんなで力を出していこうと、そのために行政が、あるいは我々が、あるいは誰がどんなようなシナリオで3年間トライするとこのようになるんじゃないかというチャレンジをする、約束事を書くのがこれなんです。なのでその問題をどうやれば解けるのか知恵を出していくのがこの3年間かと思っております。

(L 委員)

住んでいると中々わからないことですね。

(委員長)

そういう話も色んなところでしていければいいと思います。

(K 委員)

ちなみに先ほど人口減少のお話がありましたが、問題は構造ですよ。町が出来たのがここ 70 年で、新興の町です。団体なんかも JC の話も出ましたが、わたしはロータリーに関わりましたが、ロータリーに入っているのを、他の町を見るとかなり有力な人が入ってきているのですが、わが町では入っていないのです。なぜかと私はそこを歴史的にうちの町はそこまで言っていない。他の町とは違う。経済界はまず生活を支える経済を優先してきた町で、文化とかを考える暇がなかったわけです。ようやく今はそれらしいことを外から影響を受けるから動いているが、根本は経済をまず確立するぞという町だったところ。なので文化やロータリーとか奉仕活動なんてやっつけられるかというのがこの町の実態だったのです。わたしも今考えたいのが、この町が置かれている歴史的なこだわりがない。本当に年寄りが偉そうな顔をして町を牛耳るなんてことは絶対ないわけで、本当にみんなが力を出し合っている町だと思っております。その点はいいと、素晴らしい独特な構造になっていると思います。そのあたりをベースに踏まえて、考える部分もあっていいかなと思います。

(委員長)

ありがとうございます。では 1 回目はここで終わらして、2 回目で展開していこうと思います。進行を事務局に戻します。

(事務局)

小林委員長、議事進行どうもありがとうございました。事務局のほうから 1 点ご報告させていただきます。次回の策定委員会については、2 月頃を予定しておりますが、進捗状況を見ながら委員長、副委員長にご相談させて頂き、委員の皆様にご改めまして開催案内をさせていただきますので、よろしく願い致します。

それでは最後に、副委員長お二方より一言ご挨拶頂きたいと思います。

(副委員長)

はい。皆さんから色々な意見をいただいた中で、3 年間協議していくわけですが、環境都市なかしべつということで、これから 20 年後どうするかというマスタープランですが、当初中標津は商業と酪農の町で、一千億の売り上げがありました。現状は 800 億ということで、下がっているのが現状となっております。その中でやはり中標津町を取り組む中で管内の町も取り込みながら、これから中標津が発展していくためにはどうしたらいいのか、町民はどうしたらいいのか、企業はどうしたらいいのかということなど、実のある 3 年間にしていきたいと思っております。自分自身北方領土のことを少しはわかっている、それも含めな

がらまちづくりを本格的にこの20年は入れていきたいなと思っておりますので、よろしくお願いたします。

(副委員長)

本当はたくさん意見を言いたかったのですが、副委員長なので言えませんでした。中標津で最初に都市計画マスタープランに関わったのが、先ほど話しにもありましたワークショップをやったときに西部地域として冊子にも名前が載っていますが、その時に何を話したかという、都市計画マスタープランの外側、白地地域になぜ下水道がいかないのかと話をしたのですが、コンパクトにするには仕方ないという話がありました。それでも町は大きくなっていきまして、でもそこには下水はできないというのが町の方針です。それが今回のマスタープランでどうなっていくかが楽しみでもあります。その当時わたしは50代でしたが、今回メンバーになるときになんとかもっと若い人に入ってほしいと思いましたが、ただその人たちはみんな働いている人ばかりです。なのでこういう策定委員会をする際には、昼間には参加できないけど、夜なら参加できるという方たちがいたので、そういう意見をたくさん出していただきたい。高校生にも聞いてほしいし、中学生にも聞いてほしい。そんな意見を吸い上げてまちづくりをやっていかないと、私たちは20年後にはもういない。出来上がったときにはもういないので、喋って意見を言った方が次の世代としてやっていけるようなマスタープランにしていいただきたいなとわたしは思っております。意見も出していきたいと思しますので、今後ともよろしくお願いたします。

(事務局)

長時間にわたり色々貴重なご意見等賜りまして、大変ありがとうございました。それでは、以上をもちまして第1回中標津町都市計画マスタープラン策定委員会を終了いたします。本日はどうもありがとうございました。